



「木陰の物語」が見る人の心に喚起するもの

～「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」で集めた声の分析から～

齋藤 清二

(立命館大学総合心理学部)

What "In the Shade of Family Tree" Evokes in People's Mind ?
:From the analysis of the voices collected in "Kokoro Kasanaru Project"

SAITO Seiji

(College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

This study is a part of the series of research, conducted in 2015, "Ritsumeikan University, East Japan Family Support Project, Spin-off Plan: Memories for the Future - Kokoro Kasanaru Project -, Dan Siro Family Manga Exhibition". The purpose of this study is to interview 250 visitors to the manga exhibition, to describe what they are experiencing by appreciating the work, and to generate a hypothesis closely grounded on the data. Many of the viewers of "In the Shade of Family Tree" felt "various stories of various lives" in their experiences. The experiences touching those diverse stories were a creative one that repeaters could feel as "new to read". The viewers superimposed their own or imaginary experiences on "In the Shade of Family Tree" through "sense of presence" and "sense of overlap". They also experienced a variety of emotions such as "affection with physical sensation", "feeling of moisture", "excitement!" and "suffering together".

On the other hand, by reading the stories, viewers were urged to look back on their own experiences and to reflect their selves. The arousal of these "reflection" and "emotion" did not take place independently, but it appeared that they were intertwined and developed simultaneously. It seemed that "feeling of overlapping" and "recognition of otherness" were involved as a trigger and a promoter, and "personal stories" were induced from there. As an arrival point of such a process, the viewer found various "landing points". They were expressed as "getting lessons learned", "immersing words", "touching big ones", "absurdity in life" and so on.

Through those experiential process, viewers have experienced "returning among individuality and generality" processes. The synergistic effect of the story and picture of "In the Shade of Family Tree" was functioning as a whole supporting these processes. Furthermore, the existence of "a viewpoint to watch over the whole process" allowed participants to experience the feelings and reflections freely, to share them, to recognize themselves as individuals, and again to connect with a variety of stories that went beyond the space-time. Finally, this structure seems to be important for the formation of a place where people can experience their process.

本研究は、2015年に行われた「立命館大学、東日本・家族応援プロジェクトのスピノフ企画「未来のための思い出－ココロかさなるプロジェクト－：団士郎家族漫画展」をフィールドとする一連の研究の一部である。漫画展に来場した250名にインタビューを行い、彼らが作品を鑑賞することによって何を体験しているのかを描写し、そこからデータに密着した仮説を生成することがこの研究の目的である。『木陰の物語』の鑑賞者の多くは、それぞれの体験において、「いろいろな人生のいろいろな物語」を読み取っていた。それらの多様な物語に触れる体験は、リピーターにとっても「読む度に新しい」と感じられる創造的な体験であった。鑑賞者は「あるある感」「重なり感」などを通じて、『木陰の物語』と自身の体験、あるいは想像上の体験を重ね合わせ、その体験の中で「身体感覚を伴った感情体験」「しっとりとした感情」「感動!」「共に苦しむ」と表現されるような多彩な感情を体験していた。一方では『木陰の物語』を読むことで、鑑賞者は自分自身

の体験や自己を振り返ることを促されていた。これらの「省察」と「感情」の喚起は、独立に起こるのではなく、絡み合って生起し進展していく様子が見て取れた。それらのきっかけとなり推進するものとして、「重なり感」と「他者性の認識」が関与していると思われ、そこから「個人誌の語り」が誘発されていた。このようなプロセスの到着点として、鑑賞者はさまざまな「それぞれの着地点」を見いだしていた。それらは「教訓を得る」「しみ通る言葉」「おおきなものに触れる」「人生の不条理」などとして表現されていた。それらの体験のプロセスを通じて鑑賞者は、「個と一般の往還」プロセスを体験していた。これらのプロセス全体を支えるものとして、『木陰の物語』の形式がもつ「物語と絵の相乗効果」が機能していた。さらにそれらのプロセス全体を「見守る視点」の存在が、参加者が自由に感情や省察を体験し、共有し、個人としての自分を認識するとともに、再度それが時空を超えた多彩な物語と繋がることを体験できる場の形成に重要であると思われた。

Key Words : stories, qualitative research, manga exhibition, family support

キーワード：物語，質的研究，漫画展，家族支援

1. はじめに

2011年3月11日に起きた東日本大震災に対して、対人援助学の創造を標榜する立命館大学応用人間科学研究科は、直ちに「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げた。このプロジェクトは従来型のトラウマやPTSDへの支援モデルとは、その考え方を大きく異にしている。村本(2015)は、「トラウマのトラウマたる所以は、恐怖に伴う圧倒的無力感と孤立無援感にあり、他者と共有不可能な経験を抱えてしまった者は、世界との関係を破壊される。被災や被蓋の経験が関係性にもたらす否定的影響をトラウマと捉え、その回復は、破壊されてしまったさまざまな関係性を紡ぎなおすことと考える」と述べている。

トラウマを個人を襲った侵襲的な体験とのみとらえ、そこからの回復を個人へのかかわりによって促進するというのが、一般の心理学的なトラウマへの対処法であると考えられる。その方法として個人への薬剤投与や、心理療法を用いるという戦略は、もちろんそれを必要とする人にとっては意味のないことではない。しかし、大規模な震災などの地域全体を巻き込む巨大なトラウマの影響を考慮する場合、このような医学モデルや、個人心理療法モデルによる支援は必ずしも成果を上げてこなかった。村本が提唱する「関係性の観点からとらえなおされたトラウマ理論」は、大きな意味をもっている。

このプロジェクトの一つの特徴は、心理療法家であると同時にプロの漫画家である団士郎の漫画作品

である『木陰の物語』のパネル展示と複数の対人援助のプログラムを組み合わせている点である。『木陰の物語』は、たくさんの無名の家族の物語からなる。家族療法家でもある団が半世紀近くかけて見分してきたエピソードを漫画にしたものである。村本(2015)はこのような漫画作品という一種の物語を通じての交流をこのプログラムの中心に置く理由を以下のように説明している。

人々の被災と復興の物語を一枚岩のわかりやすい大きな物語へと収束させるのではなく、もっと複雑で繊細で奥深い小さな物語を聴き取り、記述していくこと、その実践の努力は、すでに確かな手応えを感じさせてくれている。多様でユニークな他者の物語との出会いは、私の人生に変化を与え、あなたに戻され、その都度更新される往復の中で、私たちの物語が育っていく。あるいは、私を介して伝えられた物語が別の誰かに届き、あらたな変化を生んでいく。そこにはもはや、援助する人/される人の区別はない。共に復興の物語を創っているのである。(p5)

このように、人々の関係性に焦点をあて、物語的な交流を通じて災害支援を行おうというある意味壮大なプロジェクトが、すでに8年にわたって続けられている。しかし、その現場で、多様な個人が何を経験しているのかについては、必ずしも明らかにされているわけではない。プロジェクトを支える大きな理念と、個々の極めてローカルな状況を結びつけ

るような実証的な知見を積み重ねていくことは、プロジェクトそのものの評価のみならず、そのような体験の意味を関係者が共有するためにも必要であると思われる。

本論文では、2015年に行われた、「立命館大学、東日本・家族応援プロジェクトのスピノフ企画「未来のための思い出－ココロかさなるプロジェクト－：団士郎家族漫画展」をフィールドとする一連の研究の一部を報告する。漫画展に会場した一般の人たちが、その現場で何を体験しているのかを描写し、そこからデータに密着した仮説を生成することが本研究の目的である。

2. 研究の対象と方法

2015年6月27日（土）～7月5日（日）に京都市で行われた、「立命館大学、東日本・家族応援プロジェクトのスピノフ企画「未来のための思い出－ココロかさなるプロジェクト－：団士郎家族漫画展」をフィールドとした。この展示会は乗降客の多い京都市の私鉄の駅において実施された。立命館大学応用人間科学研究科（当時）の教員および大学院生が、来場者に研究目的を口頭で説明し、会場でのインタビューとICレコーダーによる録音を依頼し、許可を得た250名に対して5分～30分程度のインタビューを行った。録音はすべて逐語録として書き起こされ、今回の研究の分析データとして用いられた。

質問項目は①漫画展の感想を聞かせてください、②あなたの人生に起こった思いもかけないことや困難を乗り越えたコツを教えてください、③現在、その渦中にある人へのメッセージやアドバイスをお願いします、の三つであったが、本研究ではそのうちの最初の項目「漫画展の感想を教えてください」に対する回答のみについて分析を起こった。

逐語録データの分析は木下（2003）の修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（M-GTA）によって行った。略述すると、まず、今回の研究の分析テーマを「団士郎家族漫画展の来場者が漫画展を経験するプロセス」と設定した。分析焦点者は同展示会の来場者とした。インタビューの逐語録のテキスト

データより直接暫定的な概念生成を行い、個々の概念についてのワークシートを作成した。ワークシートは概念名、定義、ヴァリエーション、理論的メモからなる。ワークシートを用いて生成した暫定概念と面接データを連続比較することによって概念を精緻化し、最終的に32個の概念を生成した。ついで各概念間の関係を検討し、9個のカテゴリー「時空を超える多彩な物語」「重なり感」「身体を巻き込む感情」「省察の喚起」「誘惑される個人誌」「ほどよい落としどころ」「個と一般の往還」「物語と絵の相乗効果」「見守る視点」を生成した。次いで各カテゴリー、概念感の関係を検討しつつ、さらにデータとの継続比較を行い、カテゴリーと概念間の関係を示すスキーマとストーリーラインを構成し、生成されたグラウンデッドセオリーとして示した。

分析結果の記述は、木下（2003）の概念説明的記述法を採用し、生成されたカテゴリーを、各概念同士の間を中心順に説明していく方式とした。結果と考察は分けずに記述し、項を改めて総合考察を行った。

結果と考察の記載中の[N1]～[N○]は研究協力者の語り（ヴァリエーション）を表し、[]は構成された概念、< >はインタビュアーの発言を表している。

結果と考察

カテゴリー1：C1「時空を超える多彩な物語」

このカテゴリーは、団士郎家族漫画展の来場者が『木陰の物語』を鑑賞した経験の全体像を描写する語りに現れた典型的な特徴を示している。今回の漫画展では4つの作品が展示され、来場者の多くはこれらの全ての作品を鑑賞してその全体の印象について述べていた。その典型的な表現は、わずか4つの漫画作品の中に、[いろいろな人生のいろいろな物語]が表現されているということであった。例えば、ある50代台女性の来場者は以下のように語っている。

[N1]

いろんな時代のいろんな…なんかまあ困難？…

が描かれていて、今もむかしも、いろんなことがある中で生きていたんだなって。自分の家族、特に戦時中のこととか、ま～いろんなことがあった妹とか姪っ子とかの、たくましさっていうか、そんなことを思い出しながらみていました…。

また、ある20代男性は以下のように語っている。

[N2]

なんかすごく色々な話があるんだなあって思っただんですけど、結構歳行った人の話が多かったんですけど、ただなんかすごい他人事だとは思えなくて、抱えている問題とかの本質は若い人もやっぱ年上の人たちも変わらないんだなあって感じがありました。

上記の二人の来場者は年齢も性別も異なり、もちろんそれぞれの人生経験も異なっている。それにもかかわらず、二人は『木陰の物語』の中で、いろいろな時代にいろいろな人がいろいろな物語を経験しているということを感じ取っている。それらの一部は自分の経験や身の回りのできごとなどと関係をもっているが、全く異なった時代の異なった場所において、それらの多様な物語が一種のつながりを持っているという感覚に違和感をもっていない。このような語りは、今回のインタビューの第一の質問に対する感想のひとつの典型像を示していた。また別の50代の女性は以下のように語っている。

[N3]

う～ん、まああの～、たくさんあったんで、ひとつを見るごとに色々思い出す人とか、主に自分の家族のことだったりするのかな？あんなことあるな、こんなことあるなって思いながら、人間って難しいなって言うか、一人ひとりそれぞれの思いがあるんだけど、それが上手く伝わらなかったり、見えなかったり、違う形で届いてしまったり、なんて言うかちょっとしたずれ違いとかで溝が出来てしまったり、いろんなことがあるなあと改めて思いながら見てました。

この語りからは、この漫画作品を鑑賞するという体験が、そのひとつひとつは微細ではあっても、非常に多くの要素を内包しているということが見て取れる。作品の鑑賞の体験そのものが、多彩な連想や記憶の想起、省察、感情体験などをへて、一つの洞察にいたる複雑なプロセスをとっているように見える。さらにその洞察そのものは、単純な結論として語れるようなものではなく、「いろいろあるなあ」という表現がとりあえずの総括として適切であるように見える。このような「多様性」の認識は、参加者の多くの語りに認められた。さらにこのような多様性の洞察はこの漫画展の来場者の経験プロセスと深い関わりを持っていると思われた。言葉を換えれば、「時空を超える多彩な物語」とは『木陰の物語』そのものの描写であり、今回の検討対象となっている来場者の体験プロセスにおいて、出発点であると同時に終着点であるという理解が可能である。

このような『木陰の物語』のもつ多様性は、これまでに漫画展や団士郎氏の作品にすでに触れたり、親しんできた来場者にとっても、[読む度に新しい]という感覚をもたらしていた。以下は30代女性と50代女性の語りである。

[N4]

何度か読んだことがあるんですけど、毎回、ぐつとくるものが違う。興味深いと思います。

[N5]

前その、この前にね、冊子を読ませてもらって。何回も何回も読んでたんです。1回ぱっと読んでももう一回読みたくなる。今も2周くらいしたんですけど、いいです。すごく。気持ち伝わるとか、気持ちわかるとか、そういうの、すごく、はいってくるな。たくさんの人に読んでほしいなと思う。

同じ作品をくりかえし読んでも、読む度に新しい感情喚起が生じ、新しい洞察が生じるということも多くのリピーターが語っている。これは『木陰の物語』が固定したストーリーとしてではなく、それを読む体験がその時その時一回限りの創造的な体験と

なっていることを示唆している。

カテゴリー 2 : C2 「重なり感」

『木陰の物語』を鑑賞した来場者の感想に非常に多く含まれるものとして、「こういうことは確かにある」という【あるある感】と、「自分自身にもこれと重なる経験がある」という【重なり感】の感覚についての語りが挙げられる。ある40台の女性は以下のように語っている。

[N6]

やっぱり、自分の子供がいてるので、きょうだいの話で、やっぱり気を付けて育てないとだめだなとか。自分も姉妹なので、母もやっぱり同じように考えてやってくれて。それぞれの立場でしかわからない気持ちというのが、みんなそれぞれ抱えながら、生きていって。これからね、自分も、もっと大きくなったら娘たちにどんなふうにしてあげられるかなって。〈お母さんの立場として…〉そうですね。やっぱり自分の立場として今は見ましたね。

また、ある80代男性は以下のように語っている。

[N7]

私も戦前のね86歳、この話を見てたらいろいろなことを思い出した。戦争も生き抜いてきたしね、最後のやつ（七夕）も面白かった。今はどうしてもね、お世話をした人がいわゆる損得抜きに幸せになれる世の中にして欲しいねと…。

上記の二人の語りに見られるように、『木陰の物語』の鑑賞という体験の中では、自分自身の過去の体験や、現在の体験が想起されるということが頻繁に生じていることがうかがわれる。一方で、自分の体験とは直接は重ならないということを言語化しつつ、「こういうことは確かにある」という形で、話題のつながりを意識している語りも多く見られた。以下は12歳の少女の語りである。

[N8]

人生いろいろあるなって思いました。子どもたちとしゃべるのが減っていくとか現実にあることを漫画にかいてあるからそう思いました。

また自分の直接の体験ではなく、何らかのフィクションなどのジャンルの異なる物語との重なりについて語る人もいた。以下はある中年女性の語りである。

[N9]

家族をテーマにしたある小説を思い出しながらこの漫画を読んでいたんですけどね…。お兄ちゃんがいて、あ、兄弟がいて、よくできるお兄ちゃんとまああの弟がいて、変な殺人事件に巻き込まれちゃってね、バラバラ殺人。お兄ちゃんが疑われて、お兄ちゃんがずっと「やってない」っていうことを言ってたんだけど、結局犯人が現れて、解放されたんだけど、お兄ちゃんが自殺しちゃうんですよ。それで家族がね、しんどくなって…お母さんの関わりとかね、兄弟でも仲の良い悪いとかありますよね。そういうのを思い返しました。ありますよねー。親子の関係とかきょうだいの関係とかね。でもやっぱり受け入れないよね、いかないよね…。

上記の語りにも見られるように、『木陰の物語』は、自身の直接の体験の想起のきっかけになっているだけではなく、自身の経験以外のジャンルの物語形式との連想を誘発し、しかもそれらがさらに互いに連想のネットワークとして重なっていくという発展構造があることが見てとれる。これらの連想誘発機能はおそらく、『木陰の物語』のもつ表現形式に関連していると思われる。

カテゴリー 3 : C3 「身体を巻き込む感情」

『木陰の物語』の鑑賞体験の語りの特徴的なもう一つの傾向は、【身体感覚を伴った感情体験】が非常に多く語られることである。これらは、明確に言語化された感情というよりは、「じーんときた」「じんじんきた」「ほっこりする」「ウルウルする」などのいわゆるオノマトペ的な表現が多用されており、

報告者が身体感覚と結びついた未分化な感情を表現しようとしていることが感じ取れた。

これらの感情体験の多くは、強烈なものというよりは「しっとりとした感情」をであった。特に「身体が温かくなる」とか「涙が出そうになる」といった微妙さを表現しようとする語りが多く見られた。以下の20代男性と、50代男性の語りはこういった語りの特徴を良く示している。

[N10]

えー、いろんな家族の物語があって、うーん、涙が出るってわけではないですけど、こうふわっとほっとするような、あったかくなるような感じがしました。

[N11]

新聞とかテレビとかで、ただ、わーってストーリーが流れているけど、奥底から表現しているというのがすごくじわっときました。…すごく、しみじみと。すごいなんか扉を開いてもらったような気がします。

さらにそれらは、「感動!」と呼びうるようなより強い感情についての語りにもつながっていく。以下は70代と50代の女性の語りである。

[N12]

あのう、引き込まれて読みました。あの、何か、大変、絵があるので、よく…。はい。分かりました。なんだかも、感激して涙出てきます。いいもん見せていただきました。【#14-33】

[N13]

はい。とてもよかったです。えっとね、なんかちょっとうるうるきていて。〈思い、何か残った場面とかはありますか?〉はい、泣けるぐらいです。〈響くものが〉そうですね。4つともよかったです。全部いいねを押してしまいました。

一方で、『木陰の物語』を読むことで、物語中の登場人物の辛さを共有する「共に苦しむ」体験が語

られることもあった。これらの感情は、「ジーンとする」などの表現の基底に隠れている可能性もあり、具体的に言語化されることは少ないが、多くの鑑賞者にとって重要な体験である可能性がある。以下はある初老の男性と20歳代の男性の語りである。

[N14]

ち〜と辛かったかな。最後のやつな。あんまり〜、綺麗事ではすまん、と。

[N15]

ちょっと…かなしそうだった…。物語…かなしくて…でも、物語、悲しいけど、頑張っている…頑張っているっていう感じする。

カテゴリー4：C4「省察の喚起」

多くの来場者は、『木陰の物語』を読むことで、「考えさせられる」「自分をふりかえさせられる」体験が生じたことについて語っていた。以下は70代の女性と50代の女性の語りである。

[N16]

ここに書いてある文章は、非常に身近だね。私たちの家族のことでね、いろいろ考えさせられることがあるな〜と思って。

[N17]

なんか、ふだん、自分が通り過ぎたことが、ああそうだったんだなということが、いっぱいあって。その「自分が一番で」〈姉妹の…〉姉妹の話とか、あんまり表に出さないことも、ああそうなんや、そうだったってことが、すごくクリアになった。〈ああ、なるほど〉なんかモヤモヤしていたことが、そうやったなって、かたちですね。

これらの体験は、単に考えさせられたというだけでなく、自らを振り返り、反省するといった範疇の思考を伴っており、同時に感情体験をも伴う。[省察の喚起]と感情体験は多くの場合連動しており、どちらがどちらの原因とも言えないように思われる。以下の20代女性の語りはこのことを典型的に

示している。

[N18]

私、今就職活動中で。気持ちも減入ってて。で、まあ、これ読ませてもらって。もっと、なんだろう、普段の生活で、もっと大切にしないといけないことがいっぱいあるなって思って。(涙ぐむ) はい。もっと、大事なことを大事にしないとって思いました。

一方で、「他者の経験は分かるはずがない」という【他者性の自覚】に注目する語りもしばしば見られたが、そこから「だからこそ考えなければいけない」と、他者からの視点を取り込もうとする方向性が認められた。以下の30代女性、30代男性、50代男性の3人の語りは、いずれもそのような視点を含んだ語りを示している。

[N19]

そうだな～人の人生っていうのは、外で見るだけでは語れないけど、深みがあるし、やっぱり、中にあったように(暮れの七夕)、メディアとかが伝えるものとかは、薄っぺらなもので、それだけにとらわれずに生きて、生きていけたらなって思った。ですね。

[N20]

やっぱり実際に体験とかしているわけではないし、でも、そういった歴史の中でいま自分たちの生活があることを、やっぱり歴史からなにか知っていくこととかたくさんあるのかなあって思いましたね。でもやっぱりね、そんなにね、大変なこと、同じような大変な経験ってしていないけれど、よくこっちでね、なんだっけ、暮れの七夕なんかはね、やっぱりなんだかんだで違う事件で大騒ぎしている世の中であるなあって思いますね。

[N21]

いやまあ自分はそうじゃないと思ってるけど、だから親とかいうのは考えている以上に思ってくれてるんだなあって気付けて良かったです。

カテゴリー 5 : C5 「誘発される個人誌」

『木陰の物語』を読むことを契機として、自らの個人誌(ライフストーリー)が想起され、それが語り出されることがインタビュー中にしばしば認められた。今回は質問1に対する答えに分析範囲を限定しているので、その中で個人誌そのものが語られることは抑制されているにもかかわらず、長大な個人誌の語りに移行する人もあった。

ここでは、少数の実例を掲げるにとめるが、『木陰の物語』の鑑賞体験とその後に引き続くインタビューは、エピソードの想起、連想、感情体験、省察などを通じて「個人誌の語り」を誘発する強い傾向があるように思われた。特にそのきっかけは、『木陰の物語』と個人的体験の重なりによってなされるものと推定される。以下の40代女性の語りはそのようなプロセスを明瞭に示している。

[N22]

どこの家庭でも起こり得るようなことだなと思いますし、私のいえでも、いろいろと悩みがあって。娘が2人いますけど、二人ともまだまだなんか、前に進めないようなこととか、悩みもいっぱいあって、今なんか、すごい戦ってるなっていうのをね。親なんですけど、口出ししすぎると、反発されて、親の方が傷ついてしまったりしてるんですね～。だから～ほどほどに見守ってほしいなと思いながら、読んでました。

さらには、個人的な体験の語りから、壮大な個人誌の語りへと発展することもあった。以下は80代男性の語りである。

[N23]

…あの、五年生の時に戦争におうてます、小学校ね。それから、ちょっと感じが似ていることがある(「戦の中で」の漫画)。〈ご自身の戦争体験されてということですね〉私小学校五年生の時に戦災、空襲にあいまして。〈あ、京都で〉え? 京都じゃない、私大阪で。〈大阪だったんですね。なるほど。思い出したりされたんですか〉小学校五年生の時ですから。今は息子のところに世話に

なっていますから、京都ですけどね。小学校5年生の時にはちょうど戦災に遭いました。だから、戦後のあの、あれ、戦後の貧しさとか書いてあるでしょ。よう似たなって。全然そんな目に遭わんと大きくなっている方は〇〇やけどね。〈そうですな〉…（以下壮絶な語り語られる）

『木陰の物語』そのものは、当然のことながら、語り手の経験とは異なっているにもかかわらず、自身のストーリーが強く想起されるのはなぜかという点が問題になる。おそらく想起のきっかけになるのは、「重なり」「類似」であって、完全に一致していないことが、むしろ、広範な想起の可能性を惹起するのではないかと思われる。

一方では、感想を求められたことをきっかけとして、必ずしも『木陰の物語』とも『個人誌』とも直接関連のない、一般論的な語り語られる例も少数にみられた。以下はある80代男性の語りである。

[N24]

〈感想を聞かせていただけますか。〉コミュニケーションですね…東日本のことでだいぶ調べたりして、仙台と岩手と釜石と。特に岩手がね、岩手が昔、田村麻呂が滅ぼした縄文の末裔がいたんですよね。その時分に・・寂聴さんが金色堂で得度したでしょ。まあ金色堂はあれだけど、だからあの時寂聴さんがしきりにいったのが、「なんでもいいから自分でできることをやってほしい」とそれから、「なんでもいいから自分の思いを発信してほしい」とそれで充分なんですよねと、…そういう意味では結局コミュニケーションということとで…。

カテゴリ6：C6「それぞれの着地点」

『木陰の物語』の鑑賞体験は多様な体験を生み出すが、そのプロセスの到達点として、それぞれの鑑賞者は各人にとっての一種の落としどころを見出すことになる。そのような「到達点」は、各人において異なっており、様々な形で語られていた。そのひとつの典型は「ほどよい着地」である。このような着地点は、『木陰の物語』の読解の到達点として

語られると同時に、鑑賞者の物語的追体験の到達点としても感じられる。以下の70歳代と80代の二人の男性の語りにはそのような「ほどよい着地」が示されている。

[N25]

…お母さんはお母さんで大変やったし、お母さんの人生あったけれども、子どもはしつけられて、ほっとかれたゆんかな、すてられた気持ちあったと思うし、あれて八つ当たりしたんちゃうかな～でも最後はお母さんの気持ちもわかって、ハッピーエンドやったんちゃうかな～。やからこうなれば良いけれども、こうならんと完全にも～別れてまうこと多いでしょ～。そう考えると、これすごいこと終わってる。

[N26]

うちの親も戦時中すごしとったからな。これ、苦労してるなって思った。実家、大きかったからね～おばあさんが、いておじいさんがいて。今は、なにもかも、息子の方が会社しとるからね。実際に、実の親が苦労したな～。いろいろあったわな～って。今思えばありがたい思って。

『木陰の物語』を読み、個人誌が想起されることを通じて、経験に基づく知識が獲得され、それを「教訓を得る」として言語化する人もいた。以下の20代女性と60代男性の語りには彼女/彼にとっての教訓が明瞭に語られている。これらの教訓の言語化によって、他者へのアドバイスへの転用も可能になる。

[N27]

最後のしてもらったことは、忘れても、してもらえなかったことばかり覚えてるな～と最後まで反省してそういういいことも覚えていけたらいいなと思いました（#16-9）

[N28]

漫画ってね、すごく大事なものは、時間系列で進んで行くんですよ。だから、あの…、一番言い

たいのは、時が解決するよってということ。無理しないで、やれることをやっていけばいいんだよって…

一方で物語の文脈において、ストーリーの内容や展開そのものよりも、そこから浮かび上がり、[しみいる言葉]として、言葉自体に強いインパクトを感じたことを語る例もあった。以下はある中年女性の語りである。

[N29]

印象に残った話というより、ことばがあって、えっと……。すぐに出てこない……。こういうやつ。「人は話を聞いてもらうには、素人の方がいい」とか、「その方がいいアドバイスができるよ」、っていうのが……。あと、「人は自分を一番にしてもらわないと気が済まない」とかいうのも、あーなるほどーって。(＃4-4)

一方では、はっきりとした言葉やストーリーに帰結せず、むしろ人生の複雑さ、時には[人生の不条理]を、到達点として語る人もいた。結局は[解決策を与えない]ことに、むしろ意味を見いだすべきであるという語りも見られた。以下の20代女性、50代男性、40代男性の語りはさまざまな自分なりの到達点を語っている。

[N30]

しっかり見せてもらったのは初めてなんですけど。普段なかなかな考えもしないものが切り取られているなという印象でした。上手に死ぬのって難しいなってやつ、よくある話だと思うんですけど、家族なのにそういうのって難しいんだと思って。人間の複雑さというのをもった気がします。

[N31]

このいくつか見て、お母さんとかお父さんとかが亡くなるとか、どうしようもなくなる瞬間をうまくとられて、その前後のストーリーを描かれてるじゃないですか。人って生きてる瞬間に素直になれないことが多くて、ことの後に反省すること

が多いんですけども、これが生きてる時にどれだけ訴えかけられたりしたらいいのかなあと思ったんですけど。こういうのが役立つのかなあと思ったんですけど。

[N32]

結局、解決とかがなくて、考えさせようと思っている所がすごい良かったなと思います。

また、具体的に言語化しにくい感覚を「大きなものに触れる」と表現した語りも認められた。以下はある50代女性の語りである。

[N33]

なんでしょうねえ。なぜかわからないけどいいなあ。なぜかわからないけど。うん。誰も悪くないし、どの人も一生懸命に生きている感じがいいかなあって。ああ……。一生懸命に。どの家族もそうなんだけど、ねえ。なかでも、おっきなことに出会ってる……。大きな出来事に……。このお母さんと息子さんの出来事が、大きいよなあ……。それでも一生懸命に生きているところがいいなあ。

上記の語りは非常に言葉にしにくいものを言葉にしているように感じられる。これは次項のカテゴリー「個と一般の往還」へとつながるものと思われる。

カテゴリー7：C7「個と一般の往還」

『木陰の物語』によって誘発された個人誌が、短いものであっても長いものであっても、それなりに十分に語られることにより、それは社会的共生などのより広い視野に広がっていく。つまり、一般性をもつ物語群である『木陰の物語』から「個人誌」の想起を経て、個別の体験や洞察に至り、しかしそれにとどまらず、それをもう一度社会や大きな意味での人生一般などと結びつける動きである。さらに、そのような大きな視点が、一転してそれぞれの個人の物語と再度つながることが自覚される。このようなサイクルのプロセスの全体像を表現する語りその

ものは少数ではあったが、重要なプロセスを表現していると考えられた。以下の40代女性の語りはその一つの例である。

[N34]

そうですね～。う～ん、どこの家庭でも起こり得るようなことだなと思いますし、私の家でも、いろいろと悩みがあって。娘が2人いますけど、二人ともまだまだなんか、前に進めないようなこととか、悩みもいっぱいあって、今なんか、すごい戦ってるなっていうのをね。親なんですけど、口出ししすぎると、反発されて、親の方が傷ついてしまったりしてるんですね～。だから～ほどほどに見守ってあげたいなと思いつつ、読んでました。いろんな、障害をもった方のこととか。やっぱり、両親に恵まれなかったりとか。みて、やっぱり、自分の家庭のことだけで普段は精一杯で、忘れてたりとかしたりしてて、TVみたりとか事件みたりとかして、少年犯罪とか、みて、ふとなんかやっぱり自分の家庭だけじゃなくて、みんなも一生懸命生きてるけど、間違いを起こすことはあるんだなと思ったりしました。

来場者の中には、この漫画作品の内容と物語的形式について分析的な洞察を述べる人も少数ながら見られた。以下は20代男性の語りであるが、この中でも「いろいろな物語」というキーワードが用いられ、それが物語そのものや読み手の変容につながるという洞察が語られている。このような語りは直接的な感想とは別の切り口で、[物語を読み解く]ことを通じて、一般性とかけがえのない個人を物語的につなぐ動的なサイクルを表現しているように思われる

[N35]

家族の物語があって、そしてその中の話し手が出て、その人もすごい苦労したことだったり、大変だったなということが書かれているんですけど、こう、なんか、最後はそれぞれがいろんな気づきを持っているというか。なんか、こう、最初とはなにか変っている。その何かというのは話に

よって違いますし、よくわからないんですけど、変わっているなっていう変化があって、それが面白いかなって思いました。

カテゴリー 8 : C8 「物語と絵の相乗効果」

『木陰の物語』は、字だけではなく、漫画的な一種の絵物語の形式をとっている。鑑賞者の感想の中には、このマンガ形式が体験に与える効果についての語りが多数含まれていた。その多くは肯定的なものであり、物語と絵が相乗的に働いて、作品の鑑賞体験のインパクトを強めていると鑑賞者は感じていた。以下の50代女性と20代男性の語りは、鑑賞者は絵物語形式を評価するとともに、それがなぜ効果的であるかについても考察していることを示している。

[N36]

なにになにしなさいとか上から目線じゃなく、寄り添うっていうことはこういうことじゃないかな～と思うね。うんうんうん。人間性のある、現実にあるこうした。発達だけやったら文章だけやけど、絵もあるし。

[N37]

例えば、こういうのって、学校の授業とかで聞くのは聞くけど、でも実感ってわかないじゃないですか。それで、でも、この親しみやすい絵柄と言うか、この顔とか（イラストを指さして）ね。そういう風な絵柄で実際描かれているのをみると、「ああ、本当にある話やんやろうなあ」って実感がわくというか、そういう感じがしますね。

カテゴリー 9 : C9 「見守る視点」

鑑賞者の一部は、『木陰の物語』の物語形式の中にも、さらにこのプロジェクト全体の構造においても、当事者の状況から少し離れて、見守ってくれたり、応援してくれたりする人が存在することの実感、あるいはそれが重要だという解釈を表明していた。以下の30代男性、50代男性、の語りにはそのような視点の重要性が語られている。

[N38]

特に、中心となって渦中にいる、そしてその人の近くにいる人よりも、僕的には、ちょっとそのほかで横で見ている人もいるんだなということを感じさせられました。

[N39]

やっぱりね、人の力ちゃうかなって思いますね。お金とか物とかじゃなく。あの～、物質的なアドバスやなくてね、本当に応援してくれはる、そういう気持ちっていうかね。そんな現れが、木陰の物語やと思うんですけどね。

また、鑑賞者のうちの何人かは、作品の著者、プロジェクト活動をしている学生、さらにはプロジェクト活動そのものに対して肯定的な関心を語り、『木陰の物語プロジェクト』そのものを見守る存在としての作者やプロジェクトや自分自身を表現していた。以下の20代女性の語りにはその表現が見て取れる。

[N40]

作った人のことを考えました。会って話を聞きたいなと思ったんですよ。たぶんいろいろあって、これをやろうと思ったんだらうなと。うまく言葉にできないんですけど、こういうのに心を痛めるというか、何とかしたいなと思う人はいると思うんですけど、ここまでやるっていうのは。やってもどれだけ真剣に受け止めてもらえるかわからないなかで、どうしてここまでやろうと思ったのかな。○さんだけじゃなくて、共感して一緒にこれをやろうと思った協力者たちがいるわけで、どんな可能性にかけてこれをやろうと思えたのか聞いてみたいと思いました。

構成されたグラウンデッド・セオリーの ストーリーラインとスキーマ

『木陰の物語』の鑑賞者の多くは、それぞれの体験において、「いろいろな人生のいろいろな物語」を読み取っていた。それらの多様な物語に触れる体験は、リピーターにとっても「読む度に新しい」と感じられる創造的な体験であった。鑑賞者は「あるある感」「重なり感」などを通じて、『木陰の物語』と自身の体験、あるいは想像上の体験を重ね合わせ、その体験の中で「身体感覚を伴った感情体験」「しっとりとした感情」「感動!」「共に苦しむ」と表現されるような多彩な感情を体験していた。一方では『木陰の物語』を読むことで、鑑賞者は自分自身の体験や自己を振り返ることを促されていた。これらの「省察」と「感情」の喚起は、独立に起こるのではなく、絡み合って生起し進展していく様子が見て取れた。それらのきっかけとなり推進するものとして、「重なり感」と「他者性の認識」が関与していると思われる、そこから「個人誌の語り」が誘発されていた。このようなプロセスの到着点として、鑑賞者はさまざまな「それぞれの着地点」を見いだしていた。それらは「教訓を得る」「しみ通る言葉」「おおきなものに触れる」「人生の不条理」などとして表現されていた。それらの体験のプロセスを通じて鑑賞者は、「個と一般の往還」プロセスを体験していた。これらのプロセス全体を支えるものとして、『木陰の物語』の形式がもつ「物語と絵の相乗効果」が機能していた。さらにそれらのプロセス全体を「見守る視点」の存在が、参加者が自由に感情や省察を体験し、共有し、個人としての自分を認識するとともに、再度それが時空を超えた多彩な物語と繋がることを体験できる場の形成に重要であると思われた。

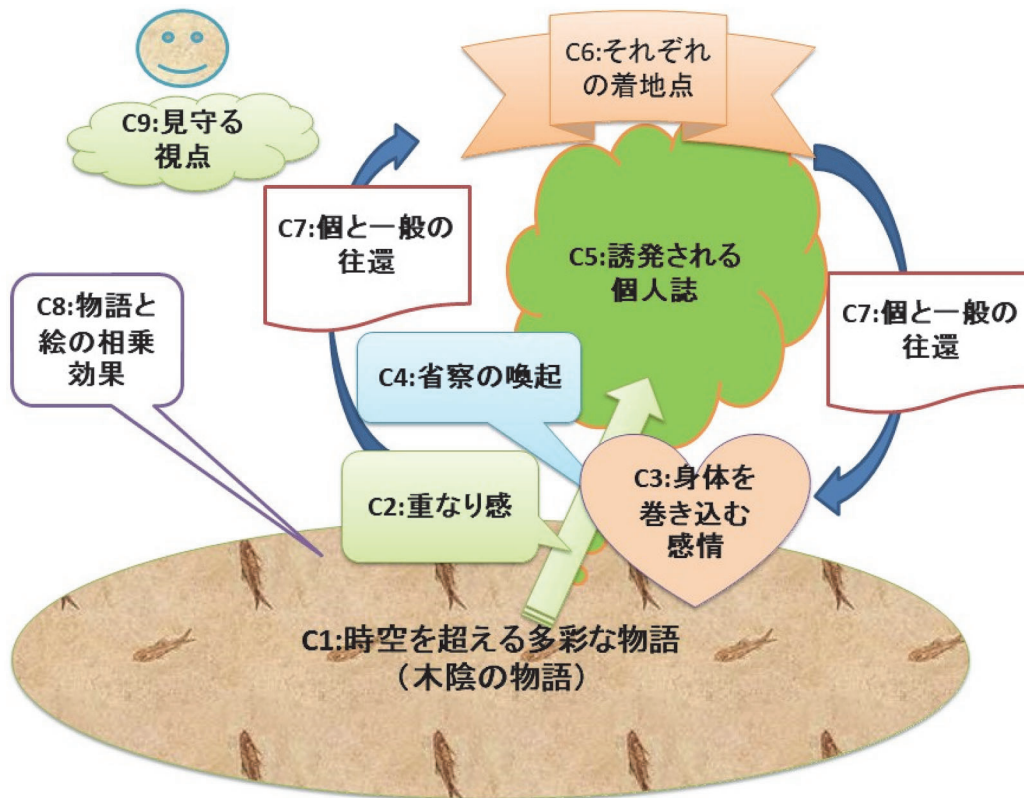


図 1. : 『木陰の物語』の鑑賞者の体験プロセスのスキーマ

総合考察：

団士郎家族漫画展は、東日本・家族応援プロジェクトの中核に据えられた実践であり、トラウマ支援のためのツールでもある。村本（2015）は、東日本・家族応援プロジェクトの中間報告において、このプロジェクトを通じて見えてきたこととして、1) 物語の力、2) 臨地実践、3) 復興の諸相、4) 学びと省察の4項目を整理している。今回の研究のフィールドとなった、「未来のための思い出－ココロかさなるプロジェクト－：団士郎家族漫画展」は、プロジェクトのスピノフ企画であり、開催地は被災地の現地ではなく、京都市において行われた。したがって、この漫画は、文字通りの意味では臨地の実践ではない。物語の力がこの現場を離れた企画においても何らかの意味と影響力をもっているとするならば、それはなんであるのか、という謎を解き明かすものとして、今回の研究は意味があったと思われる。

『木陰の物語』の作者である団（2015）は、この企画において展示された作品のうちの一つである『故郷』を例にとり、以下のように述べている。

東日本大震災プロジェクトの中心に、「家族マンガ・木陰の物語」展が置かれることになった必然は、そこに場（ギャラリー）が成立することだった。たまたま目にした人が、立ち止まって読み込むもよし、サラッと立ち去るもよし、椅子が数脚は用意されているので、じっくり読んだ後でしばらく座って行くもよし・・・ギャラリーはそこにも良い場所、更に、パネル「木陰の物語」によって、家族の様々なドラマで充たされた空間である。こんな人がいるんだ、こんな家族があるのか・・・そんな思いで一時、他者の人生に思いが及ぶ・・・どんな不運や災害にも、根こそぎ奪われてしまうことのないものが人にはある。そして残念ながら、取り戻すことのできないものもある。その狭間で、人間の回復は取り組まれている。個人の回復とは、その人固有の物語記憶の回復のことなのではないかと私は思う。(p17-18)

実際に京都の会場で偶然漫画展に遭遇した多くの人の語りには、この漫画作品が直接震災にリンクしたものではないにもかかわらず、そこに「時空を超

えたさまざまな物語」が存在していることを感じ取っていたことが示されていた。それらの物語は「他者」の物語であるにもかかわらず、鑑賞者の「その人に固有の物語」を喚起する体験となり、その体験を駆動するものは一方では「身体性を伴う情動喚起」であり、さらに「連想や考察」が、その体験を“真正な物語”の体験たらしめていることが豊かに語られていた。それらの体験はそれぞれが、ユニークなものであり、そのエンディングはそれぞれ異なっているにも関わらず、鑑賞者は個人の物語とある種の集合性をもった『木陰の物語の世界』との間を往還するような結びつきを体験していた。この集合性と個別の物語が創発的に結びつく体験が、集合的トラウマからの解放に寄与する可能性がある。プロジェクトの一員であり、ドラマセラピーを用いた支援を行っている尾上（2015）は、この集合性と個人の物語の関係について、ガットマンとラカプラの主張を引用しつつ以下のように述べている。

ガットマンとラカプラの主張に共通していることは、集合的意識の変容こそが、集合的トラウマからの解放のカギだということだ。それは、当然現実の自分や社会についての捉え返しとなる。その始まりは、一人ひとりが開始する新たな物語、その可能性の発見であろう。特に今までのものが崩れ去り、すでに支配的な物語が存在しえない喪失の状態であるときに、その回復を目指しつつも、その不在と向き合うという二重の作業が必要となるだろう。自分が中心となる物語を描くことこそ、外傷や外圧、自分を失っている状態から解き放つことになるのではないだろうか。それが新たな出発となり再生への力＝レジリエンスとなっていくと思われる。（p28-29）

このように、震災という巨大なトラウマは、さらに巨大な集合的経験である普遍的な崩壊と再生のドラマを布置しうる。そのような状況において、実際に大きな意味をもつことは、むしろかけがえのないその人個人の、小さな物語の生成であり共同構成であると考えられる。そのような物語の生成が生じる場には、その「触媒」が必要である。その「触媒」は、

なんであってもよいわけではなく、それ自体が物語であると同時に多様な物語生成能をもつ素材として『木陰の物語』は機能しているのではないかと推測される。

社会学者であり、本プロジェクトの推進と理論的基盤を提供している中村（2015）は以下のように述べている。

対人援助学は、臨床という狭い意味においてだけ実践的であるのではない。事態が生起し、ニーズがあるところに自己を置く、問題となることを「感受する身体」として自らの感度を高めていく、そうした臨地の思考に基づく、それは広がりのあるものである、「臨床（被災・被蓋に関わる課題への対応）－臨人（活動は「わたしとあなた」という顔の見える関係に根ざす）－臨家（家族への支援に関わること）－臨場（具体的な活動が展開される空間）」という諸相あるものとして位置づけることができるだろう・・・臨地には地元の言葉の理解、被災地の現状把握、被災体験の想起、地域の味わいと臭い等の相対への、身体をとおしたわけ入りが根拠になっている。（p195）

今回の研究フィールドは、直接の被災地ではない。しかし、それは被災地という場への身体性をもった関わりと無関係なわけではない。物語は単に事実の羅列とは異なり、想像力と創造性を喚起し、読者を想像的な物語世界において「身体性をもって」生きる機会を提供する。人間は経験を通じて変容するものであるが、それは必ずしも文字通りの物理的身体をもっての体験を通じてだけ行われるわけではない。物語的体験はそれが自由で生き生きとした経験である限り、ヒトの神経システムのシナプスネットワークをさえ変えていくことが現代の神経科学的研究によって明らかにされている。物語の体験と創造は、その人を、その社会を、さらには世界をさえ変容させる可能性をもっているのである（Charon, 2017）。

最後に本研究の限界について述べる。本研究はあくまでも一つの震災プロジェクトにおける、スピノフ企画のさらに一部のデータについての分析と仮

説生成である。このため本研究における結果と考察は著しい限定性をもっており、安易に一般化できるものではない。しかし、このような物語的仮説生成は、多くの人にとっての信憑性と真正性が確保されれば、限定的であってもある種の力強さをもった影響を人に与えるものである。それは似たような状況に適用しうる転移可能性をもつものと考えらえる。

本研究でのデータは複数の研究者と大学院生によって行われた短時間のインタビューによって得られたものの一部を使用しており、そのデータ（鑑賞者の語り）は、一貫性と構造をもった物語というよりは、物語の断片あるいは素材と呼ぶべきものであった。

M-GTA は、データに密着した理論生成をその目的とするものであり、事実を解明するものというよりはあくまでも一人の人間としての研究者による文脈性を重視した深い解釈からの理論（物語）生成を是とする方法論である（木下 2003）。研究者である斎藤は、この震災プロジェクトが開始されてからかなりたってから参加した者であり、実質的なプロジェクトへの関与は極めて少ない。実際に被災地の現場へプロジェクトの一環として足を運んだこともない。一方で、『木陰の物語』を中心とした、本プロジェクトにおける物語的素材や物語論的な観点には強い興味をもっている。そのような研究者の視点と文脈は、本研究報告に強いバイアスを与えていることは十分自覚した上での今回の分析である。このことは本研究の限界であると同時に特徴でもあることをあらためて明記しておきたい。

謝辞:本研究の企画、実施、およびインタビュー・データの収集と整理にご尽力いただいた、村本邦子・磯井知子・岩澤由真・川福理沙・地下昌里・前阪千賀子・清武愛流・森希理恵・奥野景子他 12 名の諸氏に深謝致します。

追記:本研究は JR 西日本あんしん社会財団からの助成（15R025）および JSPS 科研費基盤（C）の助成（16K12387）を受けて行われたものである。

【引用文献】

- Charon R (2017) *The Principles and Practice of Narrative Medicine*. Oxford University Press.
- 団士郎 (2015) 被災地で家族漫画展をしている理由, 村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (編著) 臨地の対人援助学—「東日本・家族応援プロジェクト」から見る東日本大震災の復興の物語. 晃洋書房, p11-18.
- 木下康仁 (2003): *グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—* 弘文堂.
- 村本邦子 (2015) 序章. 村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (編著) 臨地の対人援助学—「東日本・家族応援プロジェクト」から見る東日本大震災の復興の物語. 晃洋書房, p1-8.
- 中村正 (2015) 臨地の対人援助学を創る. 村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (編著) 臨地の対人援助学—「東日本・家族応援プロジェクト」から見る東日本大震災の復興の物語. 晃洋書房, p191-198.
- 尾上明代 (2015) ドラマを使った支援から. 村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (編著) 臨地の対人援助学—「東日本・家族応援プロジェクト」から見る東日本大震災の復興の物語. 晃洋書房, p26-34.

(2019. 12. 3 受理)
(ホームページ掲載 2020 年 4 月)